

近畿中部防衛局主催 第32回防衛セミナー
「北の脅威と我が国の防衛」

日 時： 平成29年7月11日（火）
場 所： 福井県国際交流会館
講 師： 防衛省防衛政策局 防衛政策課長 加野 幸司
「北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛について」
内閣官房副長官補付 内閣参事官 ^{はしもと} 槁本 賦
「Jアラートによる弾道ミサイル情報の伝達について」

講演概要： 以下のとおり

【司 会】

定刻となりましたので、ただ今より、近畿中部防衛局主催、第32回防衛セミナーを開催します。

本日は、ご多用中、ご来場いただき誠にありがとうございます。

最初に、講師が変更になったことについて、ご案内します。当初、講演の第2部は内閣官房副長官補付、小谷敦内閣参事官が講師を務めることでご案内しておりましたが、急遽、内閣官房副長官補付、^{はしもと}槁本賦内閣参事官が講師を務めることとなりました。ご理解の程よろしくお願ひします。

それでは、お手元のプログラムに従いまして、進行させていただきます。始めに主催者である近畿中部防衛局長、藤代誠から挨拶を申し上げます。

【藤代局長】

皆様、こんばんは。近畿中部防衛局長の藤代です。本日はお忙しいところ、また、非常に蒸し暑いところ、このセミナーにご列席賜り、厚く御礼申し上げます。また、日頃から防衛省・自衛隊について様々なご支援を賜り、重ねてこの場をお借りして御礼を申し上げます。

皆様はなかなか聞き慣れないかもしれませんが、近畿中部防衛局とは、防衛省が北海道から沖縄まで全国に8カ所の地方防衛局というものを置いており、そのうちの1つです。近畿中部防衛局は、ちょうど大阪にあります。管轄区域は、この福井県を含む北陸3県、東海中部3県、近畿の2府4県、合わせて2府10県の広い区域を管轄区域としています。

業務については、主に3つに分けることができます。

まず、1点目です。この広い管内には陸海空の自衛隊が所在します。そして、京都府の京丹後市という所に3年前に米軍の施設ができました。このような防衛施設を設置する場合の用地の取得、国有財産の管理、建設工事や、自衛隊や米軍が活動することに伴い、周辺地域に影響が及ぶということがありますので、それに伴う補償、そして、このような障害を防止するための施策を実施しています。

2点目は、防衛装備品についてです。当局の管轄地域には、艦船や航空機などを製造する様々な高度な技術を持った産業、企業が集積しています。このような企業が、防衛省が発注した装備品について、仕様どおりにきちんと行っているかどうか、検査や監督をするという業務を行っています。

3点目は、このような防衛セミナーを通じて防衛省の施策や自衛隊の活動について、広く国民の皆様にご理解をいただくという活動をしています。本日もこのような席を設けましたが、このようなセミナーについては、定期的に開催しています。

本日は『北の脅威と我が国の防衛』ということをテーマにしております。講師については、防衛省本省から加野防衛政策課長、内閣官房から橋本^{はしもと}内閣参事官、このお2人をお迎えしてお話をさせていただきます。

昨今、弾道ミサイルの発射が相次いでおり、加野防衛政策課長からは、北朝鮮の情勢と我が国における弾道ミサイル防衛について、お話しさせていただきます。そして、今年の3月、弾道ミサイルが飛来した場合を想定した住民避難訓練が秋田県男鹿市で行われたということも踏まえ、橋本内閣参事官からは、これらを通じてJアラートによる弾道ミサイルの情報伝達ということについて、お話しさせていただきます。このような機会を通じて、皆様の更なる安全保障への理解、あるいは、我が国の防衛に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後に、本日のセミナーの開催にあたり、多くの機関、団体の皆様に多大なるご協力、ご支援を賜りましたことに感謝を申し上げ、私の挨拶と代えさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

【司 会】

それでは、第1部を始めます。

第1部は防衛省防衛政策局防衛政策課、加野幸司課長による講演です。加野課長は、平成元年に防衛庁に入庁し、防衛局弾道防衛ミサイル室長、防衛政策局国際政策課長、日米防衛協力課長等を歴任した後、平成27年に防衛政策局防衛政策課長に就任し、現在に至っております。

本日は、我が国を取り巻く安全保障環境を踏まえ、『北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛

について』と題したお話となります。

それでは加野課長、よろしくお願いします。

【加野課長】

皆様、こんばんは。ただいまご紹介いただいた防衛省防衛政策課長の加野と申します。

本日お話しさせていただくお題は、『北朝鮮情勢と弾道ミサイル防衛』です。最近、北朝鮮から多くのミサイルが発射されています。金正恩という人物は、何を考えているのか、何をしようとしているのか、また、これに対して我が日本政府、特に防衛省・自衛隊がどのようにして立ち向かおうとしているのかということについてお話しをさせていただきます。

まず、北朝鮮のお話をする前提として、我が国を取り巻く全体的な安全保障環境について簡単に振り返ってみたいと思います。皆様もよくご存じのことと思いますが、日本の周辺には我が国の平和と安全という観点から気になる国が3つあります。北朝鮮、中国、ロシアです。また、例えば朝鮮半島における緊張の高まり、東シナ海、尖閣諸島の問題もありますし、南シナ海の方では、中国による埋め立てが進められているなど、摩擦が表面化しつつあります。さらに、我が国の周りには大きな軍隊を持った国がいくつもあります。スライドは陸軍、海軍、空軍をお示ししていますが、陸軍について言うと、世界190数カ国ある中で、世界第1位は中国、第2位は北朝鮮となっています。それぞれ160万人、102万人もの陸上兵力を保有する国が我が国のすぐ隣にあるという状況です。海軍についても、世界第2位のロシア、第3位の中国、空軍についても、世界第2位の中国、第3位のロシア、第5位の韓国、第7位の北朝鮮というように、たくさん軍事勢力がこの地域にひしめいております。このように東アジアは世界の中でも大変特別な地域であると言えます。

次に、国防費についてです。2006年の各国の国防費の水準を1とした場合、2016年までの10年間でそれぞれの国がどれくらい国防費を増やしているかということについてお話をいたします。日本は1.01倍で、横ばいになっていますが、例えば中国ではこの10年間で3.4倍、ロシアでは4.62倍と、ものすごいペースで国防費を増やしています。国防費が増えているということは、軍事力が増しているとも言えるということです。

そのようなバックグラウンドがあり、我が国の周りには多くの軍隊を保有する様々な国がひしめき、緊張も高まっているという中、今、北朝鮮がどのような状況にあるのか、何をしようとしているのかということです。最近の北朝鮮の状況について、トランプ大統領は、「非常に悪い振る舞い」だと言っており、防衛大臣は、北朝鮮の脅威は今、「新しい段階の脅威」になっていると言っています。これはどういうことなのかということをお話しする前に、まずは、朝鮮半島を取り巻く状況を確認しておきます。

朝鮮半島では、50年以上にわたって南北の分断状態が続いています。現在も非武装地帯、DMZ、38度線を挟んで150万人もの地上軍が厳しくにらみ合っているという状況ですが、それだけではなく折に触れて色々な事件が起きています。全ては申し上げませんが、主なものとして、北朝鮮は過去5回も核実験を行っており、また、今から7年前の2010年には、韓国の天安号というパトロールに使う軍艦に対して北朝鮮がいきなり魚雷を放ち、それを沈めています。また、同じ年には、韓国の延坪島（ヨンピョンド）という島に対して、北朝鮮の軍隊がいきなり大砲を放ち、民間の人も亡くなるという事件も起きています。

先ほど150万人もの軍隊がにらみ合っていると言いましたが、もう少し詳しく説明しますと、北朝鮮には全部で120万人ぐらいの軍隊がいます。他方で韓国には、陸海空を合わせて63万人ぐらいの軍隊がいて、それに加えて、アメリカ軍が2.5万人ぐらいいるという状況です。

北朝鮮についてですが、陸上兵力だけで約102万人、戦車は約3,500両も保有しています。これは一口に言ってもなかなか実感は湧かないと思いますが、福井県の人口は、皆様よくご存じのとおり、大体80万人弱です。推定人口だと、78万人程度です。福井県の人口よりも多い兵力を北朝鮮は陸軍だけで保有しているということになります。ちなみに、我が国の陸上自衛隊の定数は、大体15万人です。その10倍とは言いませんが、これほどたくさんの兵力が38度線に張り付いているということです。また、北朝鮮は戦車を約3,500両保有しておりますが、これも多いのか少ないのか、なかなか実感が湧きにくいと思います。陸上自衛隊も戦車を保有していますが、保有することになっている数は約300両です。その10倍以上の戦車を北朝鮮だけで保有しているということですので、この状況からも38度線をめぐる状況がいかに厳しいかがお分かりいただけるかと思います。

次に、北朝鮮と韓国のそれぞれの装備品についてご説明します。概して韓国の軍隊は、新しい装備品をたくさん持っており、それなりにお金を掛けています。しかしながら、北朝鮮の装備品は皆、古いということです。航空機のMiG-29だけは、北朝鮮が保有している装備品の中でも特に新しいものですが、T-55戦車というのは旧ソ連が1950年代、戦後間もない頃に造った戦車で、これをデッドコピーで造るなどして、いまだにメインの戦車として使っています。このように全体的に旧式の装備品ですので、北朝鮮としてはこれを近代化していかなければならないのですが、何しろ38度線で、まだ法的には戦争状態が続いていますので、うかうかしていると韓国やアメリカにやられてしまうかもしれないと彼らは思っています。しかしながら、新しい戦車、航空機を買うには大変なお金が掛かりますし、今から投資をして、韓国やアメリカに追い付こうとするのは並大抵なことではありません。

このような状況において、金正恩氏が今何を進めようとしているのかというと「並進路線」というものです。これは経済建設と核武力建設を並べて進めるという意味です。

北朝鮮としては、アメリカが核を持っており、いざとなれば核で攻撃されるかもしれないと思っていますので、独自に核の抑止力を持つために、核武力の建設を進めているということです。「核武力」とは、核爆弾そのものとそれを敵の領土等に撃ち込むための弾道ミサイルのことですが、その「核武力」建設に軍事費を集中投資し、戦車や航空機等の新しいものの購入は控えることにより、浮いたお金で経済建設を効率的に進めていくというのが並進路線の考え方です。そのために北朝鮮は一生懸命、いわば死に物狂いにも見えるような勢いで、ミサイルや核の開発を進めているということです。

先ずミサイルから考えていきますが、今、北朝鮮は様々な種類のミサイルを保有しています。射程距離の非常に短いトクサから、射程距離1万キロを超えるようなテポドン2の派生型まで、何種類ものミサイルを開発しています。北朝鮮はこのように射程の異なるミサイルを組み合わせることで、世界中の様々な所を攻撃の射程の中に収めているということが言えます。

また、ミサイルは保有しているだけではなく、実際に発射しています。これは開発上の理由かもしれませんが、運用能力を高めるために訓練のような形で発射しているのかもしれませんが、あるいは、これほどすごいミサイルを保有しているということを示すためにデモンストレーション的に発射しているのかもしれませんが。

このスライドは、過去の弾道ミサイル発射の主な事例を挙げています。例えば1998年8月、20世紀の話ですが、この年に初めて我が国の上空を飛び越えるような形で、北朝鮮が弾道ミサイルを発射しました。その後、2012年、2016年に射程距離の長いものを発射し、何らかの物体を地球周回軌道に乗せています。これを北朝鮮は人工衛星を打ち上げたと言っておりますが、射程距離が長いものも打ち上げられるようになっているということです。また、同じ種類のミサイルを3発同時に発射し、それを狙った所にきちんと着水させるということも行っています。それに加えて、どこでも好きな所に移動してミサイル発射が可能となる発射台付きの車両（TEL）や、潜水艦からの発射も行ってきています。

ここからは、今年の実験事例についていくつか振り返ります。先程ミサイルを3発同時に発射し、着水させたということをお話ししましたが、今度は3月6日に4発を同時に発射し、4発とも同じような所に着水させ、そのうちの3発は、あろうことか我が国のEEZの中に着水させました。また、5月14日には、北朝鮮の西側にある亀城（クソン）という町から、高度2,000キロを超える高さでミサイルを発射しています。一番射程が長いと言われるICBMでも普通に発射すると高度は1,000キロ程度です。2,000キロを超えるような高度まで上げて、それを800キロ飛行させて着水させたということです。これは新型の弾道ミサイルだと言われていています。それから、5月21日には、昨年まで見たこともなかった新しい種類のミサイルを発射しています。5月29日にも朝早くにミサイルを発射し400キロぐらい飛行させて、また日本のEEZの中に着水させました。先週（7月4日）には、先程もお話しした朝鮮半

島の西岸の亀城からミサイルを発射し、今度は2,500キロを超える高度まで上げて、我が国の排他的経済水域、EEZの中に着水しております。高度2,500キロというのもなかなかイメージしにくいと思いますが、宇宙開発等のための国際宇宙ステーション、ISSがある場所は高度400キロ程度ですので、国際宇宙ステーションの6倍近い高さということです。

北朝鮮は、ミサイルを発射する際に労働新聞という党が作成している新聞や色々な所で様々な論評を出します。先週（7月4日）のミサイル発射のときは、核兵器とともに世界のどの地域も打撃することができる最強のICBMを保有したと言っています。また、これにより、「アメリカの威嚇」のようなものを根源的に終息させ、米国の心臓部を打撃するというとも言っています。

さらに、北朝鮮はアメリカだけではなく、日本に対しても色々なことを言っています。過去には労働新聞の中で、横須賀、三沢、沖縄が射程圏内にあると具体的な地名も挙げており、日本全領土が報復攻撃の対象になるとも言っています。最近では今年6月に、アメリカよりも先に日本列島が焦土化されるというようなことも言っています。

私どもとしては、このようなミサイルの発射を見ていて、どのような傾向にあるのか、何がポイントになるのかということ色々と分析しておりますので、そのポイントについて、大きく2つ、細かく分けて4つご紹介します。

1つは、北朝鮮が行なおうとしていること、あるいは結果として出来てきていることとして、彼らが持っている弾道ミサイル、あるいは開発しようとしている弾道ミサイルの信頼性の向上ではないかということです。これは2つあり、1つは、今、北朝鮮が開発しつつある長射程の弾道ミサイルで、例えばICBMの技術を高めようとしているのではないかということと、もう1つは、既に開発が終わり、実戦配備をしている弾道ミサイルの信頼性を向上させようとしているのではないかということです。

そのうち、開発中の長距離の弾道ミサイルの信頼性の向上についてですが、それを考える上で1つの典型的な事例は、2016年2月、先程も少しお話しをしましたように、射程距離の長いものを打ち上げて、何らかの物体を地球周回軌道に乗せたということです。これについては、北朝鮮はミサイルではなく「人工衛星」だと言っています。今、アメリカの学者でも、実際に人工衛星だったと言っている人もいます。ひょっとしたら人工衛星だったのかもしれないという可能性は否定できませんが、人工衛星の打ち上げであればよいのかというと、それは大間違いです。

要するに弾道ミサイルの発射と人工衛星の打ち上げについては、技術面でいうと非常に大きな部分が重なっているということです。例えば多段式のロケットもしくはミサイルの場合、それを1個1個切り離していくような技術、あるいは姿勢の制御や誘導の技術は、ミサイルもロケットも基本的には一緒です。つまり、宇宙開発を行なうと言え、軍事の問題ではない、だから心配する必要はない、というような顔をしておきながら、実際にはミサイルの技術が高まりつつあるということになります。それが先週7月4日

に、2,500キロを超える高度まで上がったミサイルにつながっているのではないかと
いう可能性を我々は心配をしているということです。

次に、配備済みの弾道ミサイルの信頼性の向上ということです。先程お話したように、
複数のミサイルを同時に発射し、1,000キロという長い距離を飛翔させ、同じよう
な場所に着水させたということがありました。これは、実際の作戦を意識し、飽和攻撃
のようなものができるのかということを試しているのではないかと、そのような能力が高
まっているのではないかとということが考えられます。

次に、ミサイルを考える上で大きなポイントの2つ目は、多様化の追求です。これも
2つあり、1つは打撃能力の多様化とそれによる残存性の向上ということ、もう1つは
発射形態、打ち上げ方の多様化ということです。

打撃能力の多様化とは、2016年以降、様々な種類のミサイルを織り交ぜながら発
射しているということです。先程少しお話をした、発射台付きの車両、あるいは潜水艦
からの発射を行うと、ミサイルの残存性が向上するという事です。これはどういうこ
とかというと、どこの国でもそうですが、もともと北朝鮮では、ミサイルの開発を始め
たときは、大きなやぐらのようなものを組んで、日本の種子島宇宙センターのような所
からミサイルを発射していました。ただし、これだと、この施設がどこにあるのかとい
うことを各国は分かっていますので、その場所でミサイルをだんだんと組み立てて、発
射直前に燃料を入れている状況など、衛星で確認すればすぐに分かかってしまいます。

もしかすると、そのような状況を確認しているどこかの国が、このミサイル基地を攻
撃してくるかもしれません。そうすると、軍事目的が果たせなくなりますので、そのよ
うな事態を避けるために、先程お話をしたTEL、トラクターに発射台を乗せ、そこか
ら発射する、あるいは潜水艦から発射するということになります。このような場合には、
どこにミサイルが隠れているのか、その準備がどこまで進んでいるのかは、外から確認
しても全く分かりませんし、どこかの国がこのミサイルを無力化するために攻撃を仕掛
けようと思っても何もできません。私どもとしては、北朝鮮はそのような打ち上げ方を
最近になって意識的に行っているのではないかと見ていますし、そのような能力が高ま
りつつあるのではないかとということで緊張感を持って見ているところです。

次に、打ち上げ方の多様化ということです。2,000キロを超える非常に高い高度
のミサイルの打ち上げ方をロフテッド軌道といいます。ミサイルというのは、普通は一
番遠くまで届かせようと思えば、大体45度で打ち上げて、なだらかな円を描いて飛ん
でいきます。それをあえて高い角度で打ち上げます。それによって、飛翔距離は短い
のですが、最高点、到達高度はとても高くなります。私どもとしては、このようなロフテ
ッド軌道による発射というものを、北朝鮮が最近、行い始めているのではないかと見て
います。後で我が国の弾道ミサイル防衛システムについてお話をさせていただきますが、
ロフテッド軌道で打ち上げられると迎撃をするときに色々と難しい問題が出てきます。
北朝鮮が本格的にこのロフテッド軌道で打ち上げてくることになった場合は、我々も対

応をさらに高めていかなければなりませんので、この部分についても、私どもは注目しているところです。

これまで、ミサイルの話をご説明しましたが、核についても少しだけ触れておきます。

北朝鮮は既に5回も核実験を行っております。最初に行ったのは2006年、その後、最後に行ったのは2016年9月です。この10年の間に5回も核実験を行っておりますので、実験の積み重ねにより、核兵器そのものについては既に一定の能力を獲得したという可能性は否定できないと見ています。

ここで北朝鮮が核を保有したときの大事なポイントを2つご説明いたします。1つは、彼らが持っているのは、原爆なのか水爆なのかということです。原子爆弾と水素爆弾は似たようなものだとお考えになるかもしれませんが破壊力は桁違いです。桁が違うというのは、10倍や100倍ではなく、1,000倍の違いがあるということです。例えば、長崎に落とされた原爆は、TNTの普通の火薬にして21キロトンぐらいの破壊力です。今までで一番大きかった水素爆弾は、旧ソ連が製造した「ツァーリ・ボンバ」というものでこれは50メガトンで2,000倍近く威力が違います。

それでは、北朝鮮が保有しているのは、原子爆弾なのか水素爆弾なのでしょうか。北朝鮮は、「我々は水素爆弾の開発に成功した」と言っていますが、実際に彼らが実験を行った際の爆弾の威力を地震計で地震波のような形で測定しますが、それを見ている限り、まだ水素爆弾にはなっていないと考えています。ただし、今は保有していないからといって、いつまでも水素爆弾の開発ができないというわけではないため、それはきちんと見ていかなければならないと考えています。

もう1つ、核について気を付けて見ていかなければならないことは、核爆弾を製造した北朝鮮が果たしてそれを保有しているミサイルに載せることができるかという問題です。核は非常に大きな爆弾であり、それを各国とも一生懸命に技術を磨いて小さく、軽くして、弾道ミサイルに載せるということを行っています。

気になる傾向としては、原子爆弾という核兵器を最初に製造したのはアメリカですが、最初に核爆弾を爆発させてからミサイルに乗せられるようになるまで、12回の実験を行い、6年かかっています。世界で2番目は旧ソ連、3番目は英国です。それぞれ実験は4回、5回だけで、4年でできています。その後にフランス、中国が続きますが、2年でできています。後から開発している所は、どうしても後発のメリットがありますので、一般論としては、最初の核爆弾を爆発させてから実際にミサイルに載せられるようになるまでの時間はどんどん短くなっていくということです。そのようなことから、北朝鮮も最初の核実験から10年経っていることを考えると、小型化に一定程度成功している可能性も排除できないと思います。

核やミサイル開発の今後の見通しについてですが、先程もお話ししたように、北朝鮮は並進路線という政策で、戦略的に核やミサイルの開発、あるいは運用を行っています。最近も金正恩氏は、様々な大会等で、これからも並進路線を進めていくということを表

明していますので、明日になって急に核やミサイルの開発をやめるということは現実的ではありません。そのような中、先週7月4日のミサイルの発射というものがあつたのではないかと思います。また、ミサイルを発射する際は、ロケットにきちんと火が付くかどうか、また、ミサイルの弾頭部分が高い所から落ちてきても燃え尽きたりしないかどうかというテストを行っていて、ミサイルの色々なパーツの実験もこまめに行っているということです。そのため、ミサイルの発射が先週7月4日をもって終わりかという、そうは思えないというのが今のありのままの現実です。

以上、北朝鮮の情勢とミサイル、核の話について聞いていただきました。ここからはそのような状況下において、我々としてどのように立ち向かおうとしているのか、弾道ミサイル防衛のお話をさせていただきます。

その前に、そもそも弾道ミサイルとは何かということについて確認しておきます。知っている方は知っていると思いますが、弾道ミサイルとは、ロケットエンジンで推進するミサイルで、長距離の目標を攻撃するために用い、非常に速度が速いです。ミサイルをざっくり大別すると、弾道ミサイルと巡航ミサイルに分けられます。巡航ミサイルはジェットエンジンで飛ぶものであり、これは航空機と同じです。命中精度は比較的高く、速度は比較的遅いというものです。

我々が今、問題視しているのは、弾道ミサイルです。射程が長いとか速度が速いということをお話ししましたが、どの程度遠くまで飛ぶのかというと、弾道ミサイルも色々なものがあり、射程距離が1,000キロ以下の短いものから5,500キロ、あるいは1万キロを超えるような非常に射程の長いものまであります。

北朝鮮が我が国を狙おうと考えたときには、平壤と東京間の距離は1,200キロ程度ですから、射程距離が1,000キロから5,500キロくらいの中距離弾道ミサイルを用いるのではないのかと考えられます。平壤から東京までのミサイルの飛行時間はどの程度かかるのかと言うと、速度はマッハ10ぐらいですから10分程度しかかかりません。自衛隊の一番速度が速い戦闘機でもアフターバーナーを使用してマッハ2.5程度ですので、戦闘機より4倍くらいの速さで飛んで来ることになります。

このようなことから、迎撃しようとしてもそう簡単なことではありません。とても速く、10分間程度で飛んできてしまうので、相手がミサイルを発射したことを確認してから照準を合わせて迎撃するまで、非常に短い時間で行わなければなりません。

それから、到達高度は、中距離弾道ミサイルでも700～800キロから1,000キロ程度です。そのような高い所、国際宇宙ステーションの高さの倍ぐらいの所までミサイルを飛ばして、それを迎撃することは非常に難しいということです。また、ミサイルですから、目標自体が小さいので、レーダーに映りにくいということもあります。このため、極めて精度の高い迎撃システムが必要となりますので、昔はこのようなものを迎撃するという事は考えられませんでした。

もう1点、お話ししておきたいことは、飛行機というものは、翼や胴体に何かがつ

かって、穴が開けば落下します。しかしながら、弾道ミサイルは飛んでいるのではなく、落ちてくるものです。皆様の中には、ロケットやミサイルは最初から最後までずっと火を噴きながら飛んでいるというイメージを持っている方もいらっしゃるかと思いますが、そういうものではなく、ミサイルというものは最初のときだけ火を噴いて、あとは慣性の法則で放物線を描いて落ちていきます。

そのため、どうしなければならないのかということ、弾道ミサイルには、弾頭に火薬、あるいは核爆弾を載せているかもしれませんので、それを破壊しなければなりません。つまりは迎撃して、弾道ミサイルに直撃させなければ対処はできないということです。一昔前までは、これはSFの世界と言われていました。ミサイルが飛んできたら、為す術は全くない、何もできないということでした。しかしながら、1980年代から主としてコンピューター技術、センサー技術の発達により、夢物語、とてもできるわけがないと思われていたことが実際にできるようになってきました。

ミサイル防衛については、レーガン政権のときのアメリカが、「SDI」という構想を打ち出したのが始まりです。これは、スターウォーズ計画という呼ばれ方をしたこともあります。そこからアメリカの歴代の政権を経て、息子のほうのブッシュ大統領政権のときに、このミサイル防衛システムの開発を終え、その後配備されることになりました。それと足並みをそろえて、我が国も弾道ミサイル防衛のシステムを導入することとし、我が国独自のシステムを構築するに至っています。

ご存じの方が多いと思いますが、我が国の弾道ミサイル防衛のシステムは、敵がミサイルを発射すると、それを我が国のレーダーで探知して追尾し、高い所で海上自衛隊のイージス艦からSM-3ミサイルを発射して迎撃します。それでも迎撃できなかった場合には航空自衛隊のペトリオットPAC-3ミサイルで迎撃するという多層防衛のシステムになっています。このうち、イージス艦のシステムは、先程もお話したように、非常に高い高度の所で迎撃する、大気圏外や宇宙空間で迎撃するというものです。高い高度の所で迎撃するということは防護範囲が広がるということです。この能力を有するイージス艦を3隻並べれば、日本列島を北海道から沖縄まで、ほぼ隙間なく全部防護できることとなります。また、ペトリオットPAC-3という航空自衛隊のシステムは、地上10数キロぐらいの高さの所で迎撃するというものです。発射機、ランチャーの中に、細長いミサイルが入っていて、いざというときにそれを発射させ、弾道ミサイルを迎撃するというシステムになっています。我々は、そのようなシステムを全国に配備し、日本のどの場所を狙われても万全の守りができるように体制を構築しており、また、システムの強化にも努めているところです。

さて、「防衛計画の大綱」という、自衛隊は何をしなければならないか、そのためにどのような能力を持たなければならないかという政府としての大きな計画があります。この計画は平成25年に策定したのですが、その中において、このミサイル防衛の能力をさらに強化していこうということで、イージス艦、PAC-3、レーダーについて、

それぞれ今よりも能力を強化しようとしています。

具体的に何をしようとしているのかと言いますと、まず、弾道ミサイル防衛の対処が可能なイージス艦は、今4隻しかありませんので、それを倍の8隻まで増やし、イージス艦から発射するSM-3ミサイルも新しいものを入れようとしています。また、レーダーについても、今までの旧式なものから、FPS-7という最新型のものに代えていこうとしています。それから、PAC-3についても、従来型のものからPAC-3 MSEという、防護範囲が今までの2倍以上になる性能の良いものを導入していこうとしています。

今、お話をさせていただいた新型のSM-3ミサイルにつきましては、日米で役割分担をしながら共同開発を進めており、ようやく開発が終わりましたので、今年の予算から必要な経費を積んで、実際に部隊に導入していくことになっています。これが導入されますと、多くの弾道ミサイルが一斉に飛んで来たとしても迎撃しやすくなり、また、敵がミサイルを発射してきたときに、おとりを用いることがあります。そのようなものをきちんと見分けて、本物だけを迎撃するということが可能になります。先程から何度もお話ししているロフテッド軌道で、高い高度まで打ち上げられた弾道ミサイルについても、新型の迎撃ミサイルでは随分対応が楽になるということです。

以上が日本で独自に整備している弾道ミサイル防衛のシステムです。この弾道ミサイル防衛、BMD、あるいはミサイルディフェンスの先進国はアメリカです。アメリカは技術も進んでいて、良いものをたくさん保有しています。そのような国とどのように協力して対応していくかということが、非常に大きなアジェンダの1つです。

アメリカから衛星の情報、またはアメリカしか持っていないレーダーの情報を得て、我々が対応するというコラボレーションを常日頃から行っています。また、アメリカも自身のミサイル防衛のための装備品をたくさん保有していて、そのいくつかを日本に配備しているなど、日米一緒に日本の防衛を平素から行っています。

このようにミサイル防衛の強化を行っているところではありますが、今のままで本当に大丈夫なのかという話があります。これから北朝鮮の打ち上げ方も変わってくると考えられますし、また、新しいミサイルが開発され、能力的にも考えなければならないことが色々出てくると思われます。

そのような中で、今、保有しているイージス艦とペトリオットPAC-3だけではない新しいシステムを導入する必要があるのではないかという考えもあります。現にアメリカが保有するイージス・アショアというイージス艦のシステムを陸上に上げたようなシステムや、アメリカが韓国に配備するということで話題になったTHAAD(サード)のような新しいシステムが我が国の弾道ミサイル防衛でも役に立つかもしれません。我々としては、そのような問題意識から、様々な検討を行っているところです。

このように、ミサイル防衛の強化を進めていかなければなりません。ミサイルが飛んで来たら迎撃するというだけでなく、やはり北朝鮮に立ち向かうためには、世

界中の様々な国と協力して、北朝鮮にプレッシャーをかけなければなりませんし、あるいは、各国で情報交換をして、適切な対応ができるようにしなければなりません。そのような分野でも、私どもは様々な取り組みを行っています。

スライドにはシャングリラ会合とありますが、年1回、大体5月の終わりから6月の頭ぐらいに、世界中の防衛大臣、あるいは国防大臣がシンガポールに集まって、その時々々の安全保障上の問題について議論する場があります。今年、防衛大臣にも出席していただき、スピーチの中で北朝鮮の問題の重要性と深刻さについて訴えていただきました。

また、シャングリラ会合では、世界中の方々が集まりますので、アメリカのマティス国防長官、オーストラリアのペイン国防大臣と防衛大臣の3人で、北朝鮮の問題についてどう対応するかという話し合いも行っていて、さらに、韓国の国防部長官ともお会いし、日米韓という組み合わせでも相談しています。